(三) 朝日姫白拍子となる

二人は武士に救われ危難をのがれたことを喜び、厚くお礼をいい別れ去ろうとすると、武士は、「この辺は物騒なところで、女だけの通行はあやふい、我もあてない旅人、次の宿まで送つてとらせよう」と情のこもつた言葉に、二人は従い越前福井の宿に入つた。武士は数多くの旅籠屋の内、富士屋という家がよいだろうといい、つかつかと富士家に入つた。

二人も今は安堵して旅装をとき、女中のすすめるまま、長い旅の疲れをいやすべく風呂に入つた。彼の武士はその間に、旅籠の亭主をよび、なにやらささやいていたと間もなく、亭主は風呂場に現われ、戸のすきまより風呂場をのぞいて一人でうなづいた。中の二人は武士のいう如く、旅疲れはしているが、賤しき者でないことが一目でわかる程の美人なので、これは良いかもだとほくそえんだ。この屋の亭主はかの雲助達の仲間の一人であつた。風呂よりでてきたら、武士が「今亭主の話を聞くとこの地のお祭りとのこと、明日は巡礼を休み滞留してお祭りを見てはどうか、宿泊料は我が施すべし」と、やさしくいう。二人はその言葉に甘え、その夜は祭典の見物などをして一日を終えた。

その翌日、宿の内儀が座敷に来て「誠に失礼な願いですが、貴女様は私の去年亡なつた娘とよく似ています。年恰好といい、髪かたち姿といい寸分違わないといつてよい程」といい、娘の死を思いだしてか涙をハラハラと落す。それを聞いていた武士は「それはそれは、去年の春宿をとつたときは、あれ程かわい娘はいないと思つていたのに、もうこの世にいないとはなんと無情なこと、そうか、それがしがそなたを見たとき、なんとなく一度会つた人のように思われたが、今内儀の話を聞いてはじめてわかつた。本当に内儀のいうとおり娘と瓜二つだ」というので、姫も乳母もまことのことと信じてしまつた。内儀は尚も話を続け「本当に一夜の客に失礼とは思いましたが、お願いというのは、去年のお祭りの節、娘に着せようと晴着をつくつたが、娘はついに手もささず、この世を去つてしまつた。いつも着物をみるたび娘のことが思いだされ、いつそ着物を手放してはと何度も思つてはみたが、それもできず現在にいたつてしまつた。そこに娘と瓜二つの貴女様がこられました。これは全く常日頃信仰している神のひきあわせと思いまして、きようの鎮守の祭典に、この着物をつけて娘に代つて参詣してもらいたいものと、失礼をかえりみずお願いした次第です」と、語りさめざめと泣く。姫も乳母も子を思う親の心にともに涙を催し、話に応じたらよいか迷つていると、武士は、「内儀もあの通り充分失礼なことと知つていながら、余りにも娘に似たるそなた故にとたつての願い、娘の霊を弔う意味でも、着て参詣してやつたら喜ぶことだろう」という。命の恩人その上いろいろと親切に世話してくれる武士の言葉に、さからうすべもなく姫はいわるるまま、その娘とやらの着物をつけ、宿の内儀に案内されて参詣にでた。

やがて、参詣を終え帰途についたが、ちようど昼頃ともなつたので、町はずれの茶屋千年屋に入つて食事をすることになつた。内儀が先立つて結構なつくりの離れ部屋に入りくつろいで食事のつくのを待つていたら、富士屋の使があらわれ至急の用事ができたから一刻も早く帰つて欲しいという。内儀は「今、いうとおり、一緒に食事をと思つたが急用があつてできません。なにもないがゆつくり食事をして下さい」といい、そそくさとでていつた。二人は別に怪しみもしないでしばらく待つていると、食事がはこばれ、千年屋の主人夫婦がでてきて二人に食事をすすめた。食事が終る頃、主人がいうには「あなた方は何も知らないとは思うが、あなた方を雲助より救つてくれた武士が仔細あつて金の必要なことができ全く心苦しいとであるがと、若干の金とひきかえに、あなた達を身売りしたのです。明日からはここで働いて下さい」という。二人は途方にくれ先だつものは涙ばかり、逃げようにも出口、出口には番人が警固していて出入の者を改める厳重さ、ただ二人は自分達の愚さをくやむばかりであつた。雲助といい、武士、宿屋の亭主、内儀といいみなぐるであつたわけで、どうしてものがれることのできない罠であつた。

千年屋には、傾城、遊女、白拍子、女中などと二百人余の女がいた。姫も今はこれまでと覚悟をきめ、女の部屋に入つた。新入りを迎えた女達は、いろいろ事情を聞いたり、これからの勤め方などを教えたりして親切にしてくれた。聞けば他の女達も姫と同様にかどわかされた者が多くいた。傾城の一人は「踊りの心得があるなら、白拍子にしていただくよう主人に願うがよいだろう」といつてくれたので、姫はいわるるまま白拍子にしてくれるよう主人に願つた。主人はその望を心よく受け入れてくれた。それで姫は名も鳴瀬と改め、白拍子として勤めることになり、乳母は年も年であつたので女中として働くことになつた。姫は利発であつたため、舞も歌も一を聞いて十を知る如く忽ち上達し、その美貌とあいまつて有名になつた。主人夫婦も多くの奉公人中鳴瀬につぐものがないと賞讃する程になつた。

光陰矢の如しとか、かくして早や四年余の才月が過ぎ去つた。姫は、ある夜主人夫婦の居間に入り、自分の大望の程を語り、約束の年月も過ぎた故暇をいただきたいと申入れた。その話を聞き主人はいたく感心し、そのような大望のある人とも知らずひきとめていたのは申訳けないことであつたと、若干の金子を出し路用にでもといい心易く暇をくれた。姫と乳母は厚くお礼をのべ、五年前の巡礼の姿となり笠をかむり杖を手にし、数多くの人々に送られ、千年屋をあとに、良人舎人を尋ねてゆくてなき旅にでた。